



(新機構長就任挨拶)

京都大学における図書館の役割と当面の課題

京都大学図書館機構長 藤井 譲治

昨年11月、大西有三図書館機構長が10月に理事となられたあとを受けて、機構長に就任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

就任2か月余りということで、京都大学の図書館事情については、不明なところも多々ありますが、一方で明らかに取り組まねばならぬ課題もみえてきました。気づいた課題の二、三をあげ、就任のご挨拶に代えさせていただきます。

京都大学には、中央図書館としての附属図書館をはじめとして部局の図書館・室をあわせると、50を超える図書館施設があり、教育・研究を支える組織としての役割を果たしてきています。

京都大学の図書館は、従来からの図書の収集・保存・提供に加え、近年急速に拡大してきた電子ジャーナル・電子データベース・電子ブックなどを扱うほか、学内発信型の学術情報リポジトリの構築など、さまざまな仕事をしています。

電子ジャーナルは、昨年度、全学共通の経費の増額と残りの部局負担方式が定まり

ましたが、タイトル数の増加と一部出版社の寡占化による値上げ圧力にさらされており、それへの対処は依然として大きな課題です。ちなみに昨年度



の電子ジャーナル経費は、全学の共通経費として2億円が措置され、各部局負担分約3.5億円、このほか個別に部局で支払われているものを含めると、総額8億円にのぼります。これに対して、毎年5%程度あるいはそれ以上の値上げがこの世界の寡占状況のもとに迫られています。本学も参加している国立大学図書館協会では、数年来、タスクフォースを設置し、この問題に取り組み、一定の成果をあげてきましたが、趨勢は、多くの学会がみずからの雑誌の発行を電子ジャーナ

ルを提供する大手出版社に依存するなか、思うにまかせぬというのが実情かと思えます。国立大学図書館協会では、このままでは出版社のいいなりであり、一度契約を打ち切ってはとの強硬な意見さえ出てきています。現在の研究環境からして、契約を打ち切るという方策は、あまり現実的ではありませんが、国立大学への交付金が減少するという現状のもとでは、ことは極めて深刻であり、この事態を如何に克服するかが、大きな課題となっています。

他方で、従来からの図書館運営にも大きな課題があります。図書館の狭隘化問題です。各部局、とりわけ研究資料集積型の部局においては、書庫面積が不足し、その増大が求められています。

図書館面積は、法人化以前は国の規定で、学生数・院生数・図書冊数を基礎に算定されていました。その基準で算定しますと、京都

大学の図書館面積は、61,762 m²です。この基準は、法人化によって適用外となりましたが、文科省による大学施設の充実に際しては補助の基準として、なお生きています。

ところで、京都大学全学の図書館の現有面積は、附属図書館と部局の図書館・室を含めて33,993 m²です。この数字は、先に示した方式で図書館面積を積算した61,762 m²の約55%に過ぎません。各施設面積の充足率を80%とするという京都大学の現在の方針のもとにおいても、約69%であり、図書館面積がいかに充足していないかは歴然としています。

こうした課題を解決するために、図書館機構自ら明確な将来構想を設定し、また第二期の中期目標・中期計画に盛り込んでもらうことにより、努めていきたいと思っています。

(ふじい じょうじ)

平成20年度 京都大学図書館機構 第3回 講演会

「図書館の目指す先に見えるもの - 図書館の未来戦略・未来地図 - 」

日 時：平成21年2月23日(月)13:30 - 17:00

場 所：京都大学文学研究科第三講義室

講演1：茂出木 理子氏（お茶の水女子大学附属図書館課長）

「幸せな図書館のつくりかた：ラーニングコモンズは図書館を救うか？」

講演2：古賀 崇 氏（京都大学附属図書館研究開発室准教授）

「学術情報流通のグローバル化と政策課題：IFLA（国際図書館連盟）
関連会議参加を通じて」

附属図書館研究開発室准教授着任のあいさつ

附属図書館研究開発室准教授 古賀 崇

2009年1月1日付で京都大学附属図書館研究開発室の専任准教授として着任致しました。この場をお借りして、ごあいさつ申し上げます。

最初に自己紹介をしておきますと、学部時代には法学・政治学（特に行政学）の学究に励んでいたのですが、「さまざまな学問の体系を統括するしくみを知りたい」という思いもあり、大学院では図書館情報学の研究に転じました。その間、2000年～2002年に米国ニューヨーク州のシラキュース大学大学院に留学し、「ライブラリー・スクール（図書館学の修士課程）」に身を置きつつ彼の地での図書館の位置づけ、また大学と大学図書館の実情と存在感を体感致しました。2004年より2008年末までの5年弱の間、国立情報学研究所に助手・助教として籍を置き、法制度から図書館・文書館の機能までを視野に入れた「政府情報アクセス」の研究に従事しつつ、学術情報の流通に関する調査・開発に携わりました。とりわけ、世界各国における学術情報流通の変容と今後の方向性の提示をさまざまな場面で目の当たりにし、日本として今後どのような手を打っていくべきか...と考えていたところで、この度、本学にて新たなスタートを切ることとなりました。

先に「世界各国における学術情報流通の変容と今後の方向性の提示」と書きましたが、そこにはもちろんインターネットの影響、具体的には電子ジャーナルの普及やオープンアクセスの進展といったものが挙げられます。さらには、「e-サイエンス」ということばに見られるように、研究の対象や過程についても電子化の影響は強まりつつあります。こうした中で、大学図書・学術図書

館の扱う領域（資料やサー

ビス）はどのような形とすべきか？学内の学部・大学院・研究所等はもちろん、メディアセンター、文書館、博物館などの

関連機関との連携・協働をどう構築するか？国や国際レベルでの学術・科学技術政策や学術情報政策に図書館の意向をどう反映させていくか？などの課題が日本を含めた各国で浮かび上がっており、その解決への試みもさまざまな形で実現に移っているところです。

折しも、本学においては「世界に卓越した教育・研究のライフラインとしての図書館機構の強化」を目指した図書館機構の将来構想策定への作業が進行中であり、また附属図書館の改修など新たな図書館の姿も実際に現れつつあります。グローバルかつユニークな人材と研究成果の輩出で名を馳せる本学であるゆえ、本学の図書館もそのような存在でありたいと思いますし、私もそのために尽力していく所存です。

本学の附属図書館研究開発室としては初めての専任教員として着任したということで、私は責任の重さをひしひしと感じております。これから大学図書館機能の研究開発、大学図書館サービスの研究・企画・助言、また情報リテラシー教育という職務に邁進していきたく思いますので、皆様のご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

（こが たかし）



<特集：将来構想7>

「図書館に想う(4)」

図書館なんて、もういらない？

薬学研究科教授 金子 周司

インターネットという言葉も存在しなかった私が院生の頃は、研究をするためには薬学部の図書室に日々通って、新着雑誌や高い天井まで届くほど整然と並べられた学術雑誌のバックナンバーを一生懸命読みあさり複写しては研究情報を得ようとしていた。それが今ではWebやメールを介していくらでも新着情報や電子ジャーナルが読めるようになって、図書室に院生以上の姿を見ることはほとんどなくなってしまった(かく言う私も学部の図書委員長でありながら、図書室には滅多に行かなくなった)。理系の多数を占める実験科学領域の人々は、図書館というものが存在しなくても自分たちの教育や研究に支障がないので、まるで関心を失ってしまったようにも見える。

このように大きな変化がたった10年余りで訪れたことに我々はなんとなく適応してしまった。しかし、京都大学という組織はまだその変化に十分対応できていないように思われる。その最大の理由は、学術情報の流通形態が上記のように大きく変貌したことに対して、教育研究インフラとしての図書館のあり方、図書館の位置づけの学術分野による相違、さらには費用負担を含めた維持形態を全学的に議論する場と機会が少なすぎたためのように思われる。

私が出発点を理解したのは19年度から図書館協議会の第1特別委員会に加わった時である。京大では電子ジャーナルやデータベースといった何億円もの費用が発生するコンテンツの費用負担や取捨選択が、冊子体時代の「部局持ち寄り」的なやり方でなんとなく決まり契約が続けられてきたのである。冊子体であ

れば、部局がそれぞれの専門領域の学術書を内部で検討して購入し、所在をOPAC等で明確にした上でバックナンバーを維持管理することで、60以上もの図書室・図書館を抱える京大全体としてもバランスのとれた「蔵書」を誇り続けることができた。しかし、オンラインで読む電子ジャーナルやデータベースを契約するためには、その購読する範囲が大学全体なのか、部局・キャンパス単位がいいのか、あるいは同一の出版社(ベンダー)が提供するジャーナル類を包括契約すべきなのか、どのようなプロセスで取捨選択を行い、バックナンバーをどう担保するのか、データベースや電子教科書という新しいメディアをどう新たに整備するのか、全学認証システムのような仕組みをコンテンツの見直しや整備にどう活用していくのか、費用負担はどうあるべきか云々...といった冊子体とは全く異なる観点での十分な検討が必要になる。そもそも京都大学という我が国を代表する総合大学において、どのぐらいの規模の電子的コンテンツ(蔵書)を大学インフラとして備えるべきかを諸外国や他大学との比較も交えて議論し、大学と部局の費用負担まで含めてコンセンサスを得ることは絶対に必要である。

図書館に対する京大構成員のスタンスは今や、従来と変わらず冊子体としての図書に依存・期待する人々と、学術情報の電子メディア移行によって図書館への興味を失ってしまった人々に二分されてしまったような感じさえ受ける。様々な教育研究プロジェクトが大学の中で独立して動くようになった所では、大学に頼らずに独自のコンテンツを購入する動きもある。プロジェクトが終われば情報資源は何も残ら

ずに消えてしまうかもしれない。しかしそれでいいのだろうか。

京都大学が将来にわたって教育研究に必要な学術情報をあらゆる領域において十分に享受できる環境を整えるためには、誰もが図書

館のもつインフラ機能の重大性を今一度認識し、それぞれの立場を尊重しながら議論を重ねてゆくべきだろう。その意味で今回の将来構想案とこれからの成り行きには大いに期待したい。

(かねこ しゅうじ)

<特集：将来構想 8 >

「図書館に望む(1)」

鈴木 隆洋

農学研究科生物資源経済専攻修士課程

図書館は文献と職員の存在があって初めて機能する。

学術探究にあたり重要な位置を占める大学図書館であるが、その職員を定型業務をこなす存在として定義し、低廉な労働力調達を目指すのか、あるいは特定の分野に通じた研究のパートナーとして人材を長期的に育成していくのかということは大学の在り方・理念の方向付けにおいて大きな意味を持つであろう。

この夏、金沢の新設大学がそれぞれ専門を持つ図書館職員を多数配置し二人三脚を続けてきた結果、研究と就職の両面にわたり非常に良好な成績を残したという記事がとある全国紙に取り上げられていた。

翻るに京都大学の現状はいかがなものか。

資料をどう活用し手元に届けていくのかまだ手探りの段階にあるように思われる。

旧満州国関連の資料を1人で整理し、相談が多数舞い込む方がいるとは聞いているが、どうもその方は異動を徹底的に拒否し続けた極めて稀な例外らしく、私自身は周りから他にそのような方がいると聞いたことはない。

自学自習は京大の麗しき伝統であり、1人ではわからなければ講義をさぼってでも似たようなことをやっている先達に相談するのがよいと私も思うが、誰もがその方面に詳しく顔が広い人物と知りあえるとも限らず、相談できる相手は多い方がよい。

つまり現在のような常勤をほとんど取らず、短期ないしはフルタイム非常勤を多用するよ

うなやり方は改め、安定雇用とそれなりの待遇をもってスペシャリストを育て各図書館に配置した方が好かろうと思う。

非正規という働き方を否定するものではないが、それ以外の選択肢が無いのもよろしくなからう。

また紙幅の関係で詳しくは割愛するが、様々な場で接する学内のベテランの司書さんたちは本を買うのに必要な決裁が増え続けて非常に買いづらいとこぼしている。

これが本当であるとすれば、法人化後の吉田南構内に特によく見られるように近頃の京都大学はやたらと金を使い、あるいはマスコミ受け狙いの物を放ち(カレー、学生相談室等)あるいは周知や議論もせずに規制を強化し、見栄えを良くするのに必死であるが、完全に金の使い方と方向性を間違えているのではあるまいか。

このようなことを考えている時に人環・総人図書館に本を借りに行ったらなんと巨大な薄型テレビが新たに設置され、自転車を図書館前に置くのはやめまじょうだの本の配架はこうなっていますだの愚にもつかない掲示で済むようなことを(そして既にしつこく掲示しているようなことを)延々と流しているのがであった。最早末期的症状を呈していると思った。必要なのは自転車の話ではなく大学と大学図書館の在り方を論ずることである。

(すずき たかひろ)

< 特集：将来構想 9 >

「図書館に望む(2)」

古今図書館随想

田林 千尋

文学研究科文献文化学専攻修士課程

高校在学中に、京大文学部卒の恩師から、文学部旧館にあった文学科閲覧室のお話をうかがった。床鳴りのする木造の閲覧室で、西洋の城にあるような重い鉄扉の奥、下へ下へと何層も続く階段の脇には書棚がひしめき合う。その薄暗い谷間に埋もれるようにして何時間も過ごしたというお話だった。その頃は、昼休みには閉架書庫が一度閉められていたらしい。師は時を忘れるあまり閉じこめられ、昼食を食べ損なったこともあったそうだ。先日、当時からお勤めの職員さんにお話を聞く機会を得たが、「牧歌的な運営だった」と笑っていらっしゃった。

大学入学が決まった時、私はこの閲覧室を訪れることを楽しみにしていた。ところがこの旧閲覧室は、平成に入り、文学部校舎が建て替えられた際に取り壊されてしまったそうだ。一回生の春、はじめて文学部閲覧室(現文学研究科図書館)を訪れた私は、現代的な施設にとまどい、落胆した。恩師のことばに夢想した、ひみつの隠れ家めいた図書室は、永遠に失われてしまったのだ。

しかしながら当時の記録を見ると、旧閲覧室には、老朽化・耐震性・慢性的な書架の不足といった問題が山積していたらしいので、改築には感謝しなくてはならない。施設は新しくなったが、閉架書庫に並べられた書物も、そこにただよう雰囲気も、きっと師が愛した旧閲覧室と本質的には変わらないだろう。

パソコンでの作業に行き詰まると、私はふらりと研究科図書館に赴く。閉架書庫に満ちる本の匂いに包まれると、心がしんと静かになる気がする。そういうときは、専門の書にこだわらず、目にとまった書を手取ることにしている。頁の下角が黒く垢汚れている江戸期の刊本などを見つけると嬉しくなる。百年前、だれかに

愛読された書を、今は私がこうして手にしている。この時を超えた共感のために、私は文学を愛しているのだと実感する。

専門の本を借りに行ったはずが、隣の書、隣の書へと目が移って止まらなくなってしまうことも少なくない。紙の辞書であることばを引くと、つい次々と隣の項目を読んでしまうのに似ている。私は、入学当初からウェブでの蔵書検索の恩恵に与ってきた世代の学生だ。その利便性を否定する気はさらさらない。ただ、それぞれに関連づけられて並べられた書架をじっくりと眺め、運命の書に出会う喜びに比べれば、ウェブ検索のなんと味気ないことか。書架の書物に直に接することでしか得られない、知識やひらめき、その広がりというものも確かにあると私は思っている。

また、研究室の先生方からは、機械化によって節約されるようになった時間の分だけ思考することに務めなくてはならないと、常々お説教されている。何十、何百という書から自らの目で用例を探し、一つ見つければ論文が書けた時代に比べると、パソコンによる検索が発展した今日、研究において求められる思考の水準は高くなっているのかもしれない。だが、私たち学生は検索によって用例を見つけるとそれだけで満足してしまい、なかなかその怠慢に気づけないでいる。

今、京大の図書館機構は、さらなる利便性の

ために改革に着手しているとうかがった。近い

将来、たくさんの方々のご尽力によって、私たちはより快適な研究環境を手に入れるだろう。そのご尽力に報い、利便性を最大限活用して、より発展的な研究をするのが私たち学生の務めだと自らを戒める。

(たばやし ちひろ)

<特集：将来構想10>

「図書館に望む(3)」

桂キャンパスの図書館

林 倫子

工学研究科都市環境工学専攻修士課程

私の所属する都市環境工学専攻は2006年夏に吉田から桂へ移転した。それに伴い私と図書館との関わり方も大きく変化したように思う。本稿では、桂キャンパスを拠点とする一学生の視点から、図書館に対する要望を述べたい。

吉田キャンパスにいた頃を思い返してみれば、図書館利用環境という点で非常に恵まれていた。週に数回は自転車で図書館巡りを行い、興味のある本を借りてあるいは複写して、研究室に持ち帰って成果を吟味していた。学内の図書館や図書室に加えて、岡崎の府立図書館や北山の府立総合資料館なども頻りに利用しており、それらへ容易にアクセスできる立地条件が財産であったと思う。

しかし移転後には、これらの図書館が文字通り遠い存在となってしまったため、実際に足を運ぶことは稀になった。そこで様々なサービスを活用している。まず、図書の学内デリバリーシステムによって、最寄りの図書室を窓口として学内の本を借りられるのは大変ありがたい。また最近では、司書さんに紹介していただいたILLを利用している。その結果、図書室に足を運ばずとも、研究室から学内・学外の図書館へ借用・複写の申し込みが出来るようになり、数日後にはそれを最寄りの図書室で受け取ることが出来るようになった。これらのサービスは、キャンパス間の図書館環境格差を是正するために有用なツールであると思われるので、今後は更なるサービスの向上をお願いしたい。例えば学内デリバリーサービスを更に柔軟に運用して、借りた図書館でなくても本を返却できるように



工学部桂キャンパス C クラスタ

して欲しい。また電子化によって、情報入手までの手続きの簡略化や期間の短縮化を実現して欲しい。例えば他研究科の学位論文の電子化とその公開を早急に進めていただきたい。

しかしその一方で、流通サービスの向上や電子化だけでは乗り越えられない問題もあるとも考える。吉田にいた頃は、図書館巡りの最中に書庫の片隅で、興味深い図書と予期せぬ出会いをすることもあった。あるいはテスト前に、巷の様々な誘惑から逃れるための勉強部屋として利用したこともあった。学生にとっての図書館は、自らが予め欲していた情報を得るためのシステムにはとどまらない。たまたま目に留まった本をふと手に取る、司書さんへ相談する、ゆったりとした時間を過ごすといった体験は貴重なもので、それらの活動を誘発する場所としての図書館は不可欠であろう。無期延期になってしまった京都大学(桂)図書館棟であるが、実現を切に望むところである。

(はやし みちこ)

電子ジャーナル・電子ブックがKULINEで検索できるようになりました

10月から電子ジャーナル、電子ブックが京都大学蔵書目録（KULINE）で検索できるようになりました。

これまでは、電子ジャーナルをさがすために電子ジャーナルリストをご利用いただいていたのですが、KULINEと同時に検索することができなかったため、さがしている雑誌が電子ジャーナルリストになかった場合、KULINEを再度検索する必要がありました。また、電子ブックを探すためには、出版者毎に異なる様々なリストから必要とする電子ブックをさがす必要がありました。このように、いままでは資料をさがすためにいくつもの手数をかける必要があったのですが、今回の改善により、電子ジャーナルリストに掲載している全ての電子ジャーナルの書誌、及び、多くの（「全て」ではありません）電子ブックの書誌がKULINEから一括して検索できるようになりました。

電子ジャーナルや電子ブックの書誌をKULINEから検索できるようにするためには、書誌データの形式をKULINE用に揃えること、及び、変更の頻繁な電子資料に関するデータを定期的に更新する仕組みをKULINEに構築する必要がありました。一部の電子ブックについては、書誌データの変換に課題が残っていますが、多くの電子資料についてこのような仕組みが確立したことからKULINEへ適用することになったものです。

今回、電子ジャーナルリストに収録されている延べ約50,000件の書誌データ、及び、様々な出版者の電子ブック書誌データ延べ約200,000件がKULINEから一括して検索できるようになりました。このことによりKULINEで検索できる図書書誌の約1割が電子ブック、雑誌書誌の約4割が電子ジャーナルになりました。KULINEから直接、

電子ジャーナルや電子ブックを利用することができるようになりましたので、これまで以上に電子資料が利用しやすくなりました。特にこれまで検索する手数の多かった電子ブックが容易に検索できるようになりましたので、今まで以上に活用されることが期待されます。

なお、従来の電子ジャーナルリスト、電子ブックリストも引き続き利用できますので、それぞれの特性に応じて使い分けてください。これからもより便利になったKULINEを有効に活用し、研究・学習に役立ててください。

KULINEで検索可能な電子ブック

- ・NetLibrary：約3,800冊
- ・Cambridge eBooks Collection：約600冊
- ・Springer eBooks「Behavioral Science Collection」：約90冊
- ・SpringerLink「Lecture Notes in Mathematics」：約80冊（2005年以降分）
- ・SpringerLink「Lecture Notes in Computer Science」：約1,500冊（2005年以降分）
- ・SpringerLink「Lecture Notes in Physics」：約90冊（2005年以降分）
- ・Eighteenth Century Collection Online (ECCO)：約136,000冊
- ・Gale Virtual Reference Library：7冊
- ・ebrary：約60冊
- ・The Making Modern World：約60,000冊
- ・EBSCOhost Business Source Premier：約5,000冊

=20万タイトル以上（2008.12現在）

（附属図書館情報管理課電子情報掛）

KULINE から電子ジャーナル・電子ブックへ

1. KULINE を検索



2. 検索結果から [電子ジャーナル] のタイトルをクリック



2. 検索結果から [電子ブック] のタイトルをクリック



3. [本文へのリンク] の URL をクリック



3. [本文へのリンク] の URL をクリック



4. [京大 ArticleLinker] の [Journal] をクリック



4. 電子ブック本文へ



5. 電子ジャーナル本文へ



* [資料種別] で [電子ジャーナル] あるいは [電子ブック] の項目をチェックすると [電子ジャーナル] あるいは [電子ブック] だけが検索できます。



「学習室 24」オープン！

附属図書館の24時間利用可能な学習室「学習室24」が1月19日から利用できるようになりました。「学習室24」は、91席の自学自習のできるスペース「自学24」(約210m²)と、飲食・談話ができる37席のスペース「なごみ」(約70m²)からなっています。室内では無線LANが利用できます。

「学習室24」は、京都大学の重点事業アクションプラン「附属図書館全館改修による学習・教育支援環境の整備」の一環として整備されました。10月から1階及び3階の改修工事がおこなわれていますが、その一部の工事がこのほど完了し、開室することになったものです。

京都大学の学内に24時間利用できる自学自習施設の整備については、京都大学学生生活白書や総長主催のキャンパス・ミーティングなどで学生から多くの要望が寄せられていました。このような施設は、国内では医学系や科学技術系の大学図書館、研究所の図書室など、比較的小規模で利用者数の限られた図書館室に設置されるという事例は今までもありましたが、約30,000名に及ぶ京都大学の学生・院生・教職員全員を対象として24時間利用可能な施設を整備するということは、国立の総合大学としては初めての試みとなります。

24時間開館を実施するにあたっては、図書館を利用する方々が安全に安心して勉強に集中できる環境を整備する必要があり、「学習室24」に入・退室する際には、必ず学生証あるいは職員証を認証装置に通す必要があります。このような手続きを面倒に思われるかもしれませんが、安全のためということで

ご理解くださいますようお願いいたします。また、この他にも防犯カメラを設置し、夜間には警備員を配置しています。

【利用について】

利用時間(1～3月)

- ・月曜日 10:00～金曜日 22:00
毎朝9:00～10:00 清掃のため閉室します。
祝日や図書館閉館日前日の利用は22:00まで。
- ・土日祝日 10:00～17:00
- ・附属図書館休館日 閉室

利用上の注意事項

- ・「学習室24」は学内者専用です。
- ・入・退室には、学生証あるいは職員証が必要です。必ず認証装置を通してください。認証装置を通さずに入・退室した場合、退・入室できなくなります。
- ・図書館資料の貸出・返却はできません。図書館の資料を利用する場合は、必ず事前にて貸出手続きを受けてから入室してください。
- ・飲食は「なごみ」の室内でお願いします。ただし、飲酒・喫煙は禁止です。
- ・他の利用者の迷惑になる行為をした場合、附属図書館の利用をお断りすることがあります。

4月以降の利用時間は

1～3月の利用状況をみて、
改めて決定します。



19日のオープン初日から翌日にかけて1,097名、
木曜日から翌朝金曜日にかけては1,487名の利用
がありました。(延人数)

なお、附属図書館では、学習・教育支援環境を更に充実・改善していくため、4月の全面開館に向けて改修工事が進められています。
(附属図書館)

<一冊の本シリーズ 11 >

「一冊の本から」

霊長類研究所教授 高井 正成

今でもあると思うが、百万遍の西北角に小さな本屋がある。京都にいたときは大学の帰りにちょっと寄っては、よく本棚を眺めていたものだ。今ではインターネットで全て検索できるけれど、その頃はこまめに本屋さんに寄らないといい本を手に入れることができなかつた。ある日、いつものように本棚を眺めていて手にしたのが、角川文庫の『氷川清話』だった。今でも手元にあるその本の裏表紙をめくると、23歳3月8日と書いてある。翌年の留年が決定した四回生の春休みだった。その頃の僕は買った本の後ろに買ったときの年齢と日付を書くことにしていたのだ。本を読んだら読書日記をつけるようにと言われていたが、ものぐさな僕にはそんなことはとうてい無理なので、とりあえずいつ、どこで買ったのかをメモすることにしていた。ついでに気に入った箇所や頁の角を折っておくという習慣をつけていたので、あちこちの頁は「犬の耳」だらけだ。何となく始めた習慣だったが、今本棚の古い本を手にして日付や折り目を見ると、その頃の自分が何を考え、何に悩んでいたか思い出することができる。記録というのは記憶を呼び覚ますのに役に立つ。

『氷川清話』は幕末の偉人勝海舟の談話をまとめた本だった。咸臨丸とおぼしき船が表紙に水墨画調で描かれている。ぱらぱらと頁を繰ってみると、幕末の人物を中心に歴史上の人物評や当時の世評などが書いてあり、ちょっと立ち読みしているうちに語り口の切れ味とおもしろさにひかれて買ってしまった。当時住んでいた吉田寮の一室に帰り、寝転が

っておもしろいところだけをつまみ食いのように読んでみた。坂本龍馬や西郷隆盛に始まって、海舟が幕末の志士のほとんどを彼らが世に出る前から知っていたのは驚いた。幕末の激動期に滅びゆく徳川家の側にいた海舟が、何を考えて行動していたのか、そして自分と対立する側にいた人々のことをどのように見ていたのかが口語体で書いてあってすこぶるおもしろい。また海舟よりもずっと昔の歴史上の人物に対する見解も、思わずうなることばかりであった。また幕末に一時の激情で命を粗末にしてしまった多くの人たちに対して、その心情に理解を示しながらも厳しく批判している。そして何をなすにしても根気が大事だという言葉には、思わずはっとさせられた。五回生になって生物系から地質系に所属を変えたりしているんなことがあったのだが、それから何遍となく読み返してはあれこれと自分の人生を考えていた。

一年後、どういう訳か犬山市にある霊長類研究所の大学院に入学することになった。5年間住んでいた京都を離れたのだが、荷物があまりに少ないので全ての本を持って行くことにした。『氷川清話』もダンボールの中に眠っていたのだが、何かの拍子に研究室の本棚の片隅に置くようになった。毎日ろくに勉強もせず、自分の将来もよくわからないまま自堕落な生活を送っていたのだが、この本を読むと思わず背筋を伸ばしてしまう効果があった。何遍も読んでいるうちに海舟の話に出てくる人物や時代背景が知りたくなって、幕末の本などを読みあさることになった。勝海

舟の伝記などは当然片端から読んでみたが、たいていの本は幕末までの海舟の話しか書いていないので、明治維新以降の海舟の後半生がわからなくて物足りない。また、ほめてばかりいる本は太鼓持ちみたいなものでくだらないので、今度は海舟を悪く書いている本も探してみた。あれこれ探しているうちに海舟と仲の悪かった福澤諭吉の『福翁自伝』（岩波文庫）にゆきついた。

諭吉の本というと『学問のすすめ』が有名だが、これは高校生の頃に授業で読まされて閉口した思い出しかなかった。大学に入ってからもう一度読んでみたが、やっぱりおもしろくない。ところが『福翁自伝』の方は説教臭いところがなくて滅法おもしろい。海舟が好きで読み始めたのだが、どちらと言うと自分は諭吉の考え方に近いようだ。そもそも海舟と諭吉は幕末に一緒に咸臨丸で渡米して、帰朝後もしばらくは交流があったらしいが、いつの間にか犬猿の仲になったらしい。「勝は艦長だったくせに、しごく船に弱い人だった」とか「アメリカに着く直前に勝が大恥をかいた」などと、あちこちで海舟をこきおろしている。諭吉がなぜそんなことを書いたのか、あるいは海舟が本当に船に弱かったのかについて知りたくていろいろ調べてみた。咸臨丸の乗組員の航海日誌みたいなものが何冊かでていて、どんな航海だったのかがよくわかる。天下の福澤先生も、この時点ではまだ格下だったようだ。そういえば諭吉が海舟を批判した『瘠我慢の説』も昔授業で読まれた覚えがあったが、海舟に興味が出てから読み返したら結構おもしろかった。

岩波文庫には『海舟座談』という本があるのだが、その本の後半で海舟の知人が思い出話をしている。海舟という人は実に癖のある人で、来訪者があるとまず相手を怒らせるようなことを言って、その反応を見て人物鑑定をしていたらしい。幕末から明治にかけて元

勲とか言われる人の中で海舟ほど悪口を言われている人物も珍しいだろうが、こんなところにその原因があるらしい。また大変なかんしゃく持ちで、数日間口をきかなかったりして家族や女中さん達はそのたびに困っていたそう。故人をほめてばかりいるようなおざなりな談話でないので、より実感がこもっている。昨年話題になった天璋院篤姫とも仲がよかったらしく、周りにいた人たちは二人の仲に関してもう少し踏み込んだ推測をしているが、あまり野暮な詮索をするのも品の無い話だ。

ところで何年か前に『氷川清話』が講談社学術文庫からもでていたことを知った。名古屋の三省堂で見つけて、旧版の焼き直しかと思って立ち読みしてみた。冒頭に、従来の『氷川清話』は単純な間違いの他に意図的な改竄があるので海舟の意図をより正確に伝えるために出版するというようなことが書いてある。なるほど内容はびっくりするほど違っていた。やはり本は実際に手にとってみないとわからない。角川文庫の海舟は江戸っ子らしい「べらんめえ」口調でかなり無責任に放言していて、それが痛快な魅力を産んでいた。ところがこちらでは、その語り口がかなりきちんとしていて、内容もまともな批評だ。どちらもおもしろい本なのだが、講談社版の方が勝海舟の思想というものを正確に伝えているようだ。印刷されて活字になっているからといって、本当のことが書いてあるとは限らないのだと痛感した。初めて本を手にしてから20年も経って、改めて勝海舟のことを見直した次第である。

研究室の本棚の海舟コーナーに、また1冊増えてしまった。

（たかい まさなる）

京都大学農学部図書室の紹介

農学部図書室は耐震改修工事を終えまして、施設、設備等を一新して再開しましたので報告させていただきます。



カウンター付近

1. 耐震改修前の農学部図書室

京都大学農学部図書室は大正12年(1923)に農学部が設置されたのと同時期に始まる歴史ある図書室です。創立時から収集・蓄積されてきた多くの資料があり、他の多くの図書室同様にスペースは頭の痛い問題でありました。改修前の書庫は積層書架で6層というものでした。しかし、収容冊数は13万冊程度と少なく、書庫内には床に放置された資料、箱詰めのままの資料までありました。建物各フロアーと積層書架各層との連絡も悪く使い勝手の悪い書庫のため、資料探しや書庫整理にも支障をきたしており、書庫問題は長い間の懸案となっておりました。閲覧室と別に軽読書室の部屋が設けられておりましたが、閲覧机、書架等の設備も古びて、全体的に暗く古色蒼然とした図書室でした。

2. 特徴のある蔵書

前防衛省航空幕僚長の日本の植民地についての論文が世上をにぎわせていますが、日本の植

民地についての地道な研究のためには原資料は欠かすことができません。京大全体では、朝鮮、満州など多くの植民地資料を各部局に所蔵しておりますが、農学部では植民地の農業政策についての資料を「旧植民地関係資料」として所蔵しております。何分にも戦前の資料のため、劣化が進行しており保存のため昨年度に全ての資料について脱酸処理を施しました。

3. 図書室の耐震改修

農学部総合館の耐震改修が実施され、図書室部分の改修工事は平成19年7月に始まりました。当初の設計では3階の軽読書室の前は、屋上緑化にして散歩道もあるという斬新なものでしたが、植物の維持管理の問題もあり屋上緑化は中止となりました。改修工事に併せて積層書架の解体と集密書架が設置されることになりました。改修工事中は仮図書室を農学部総合館の北東に在ります旧演習林事務室に開設致しました。改修工事が終了し、図書室は平成20年2月1日に元の場所に帰り再開しました。

4. 改修後の図書室について

改修前は図書事務室の隣に在った軽読書室は3階に移設されました。その他の部屋の配置は改修前と大きく変わりませんが、入り口をやや北側に移動させ側にカウンターを置き事務室との連携を向上させました。利用されなくなっている目録カードを1階の書庫内に移動し、利用頻度の高い新着雑誌架を入り口すぐの右側に設置しました。3階を軽読書室にしたため、新聞を手近に読めるようにブラウジング・コーナーを入り口近くに置きました。



図書室入口付近



3階軽読書室

また、図書室の設備等は閲覧機を含めて木製に統一して新調することができました。新設の設備にはキャレル、BDS（ブックディテクションシステム）、夜間返却ポストがあります。図書事務室、閲覧室には全面にOAフロアーが敷かれており、検索用端末、また利用者が持ち込んだパソコンを学内LANに接続できるようにした専用キャレルを設置しま

した。さらに、1階と地下1階の書庫に集密書架（総収容冊数25万冊）を設置して、資料は総て棚に収めることができました。現在は、書庫内の蔵書点検、棚の整理、遡及入力を進めております。図書室の利用環境が整いまして、これからはさらに便利で使いやすく快適な図書室にすることを目指しております。

（農学部図書室）

新・生物資源経済学専攻司書室

生物資源経済学専攻司書室は、改築工事のため2008年8月文学部東館に仮移転しました。改築工事完了にともない3月初めには農学部総合館1階東側に移転します。新しくなる司書室を簡単にご紹介します。

事務室と閲覧室は1階になります。閲覧室は席数が8席とあまり大きくありませんが快適な環境を提供したいと考えています。書庫は地下にあります。1階閲覧室と事務室から書庫へ行くには、一旦部屋を出て共通部分を通り地下へ下りなければなりません。このため、入庫資格のない一般利用者が書庫内図書を利用するには、職員が必要な資料を取り出す出納形式をとらざるを得ません。地下書庫には全面電動集密書架を設置しています。現在蔵書数が10万冊を超えていますが、全面電動集密書架にしても収容冊数は11万冊程度です。書庫の狭隘化はまだまだ解消とはいかないようです。

新しい司書室のオープンは2009年4月9日（木）を予定しています。ぜひ新しくなった生物資源経済学専攻司書室をご利用ください。

（農学研究科生物資源経済学専攻司書室）

資料保存の取り組みについて

図書館にはさまざまな役割がある。その中でも「古典的な」仕事が資料の保存である。過去からの資料を今現在利用者の手に届け、さらに未来に利用できるよう残していく。京都大学の図書館では現在、新たな取り組みが始まっている。

平成18年夏、附属図書館地下書庫の雑誌移動作業の際にカビが最下層の書庫全体に広がっているのを確認した。以前からカビがあることは把握し、少しずつ対策をとってはいたが、繁殖範囲は想像以上に進んでいた。要因は、書庫が集密書架で空気が循環しないこと、図書が増加や除湿機の停止、職員の目が行き届かなかったことなどが考えられる。カビは広範囲に渡っているため、すぐに除去する対策は立たず、まずは除湿器、空気清浄機を入れるという環境整備から始めた。

時を同じくして、部局図書館・室の書庫で水損事故やカビの発生が起こったことを懸念し、附属図書館研究開発室から「京都大学図書館機構・資料保存環境調査趣意書」が提出された。これを受けて学内約50箇所の部局図書館・室に対して「京都大学図書館機構所蔵資料保存環境アンケート」を実施した。この調査によると*、書庫が分散している部局図書館・室が34箇所。部局図書館・室の管理下で書庫として使用している場所が約111箇所あることが判った。そして過去数年以内にカビが発生していたのは、回答のあった半数以上の22の図書館・室で、ネズミ、害虫などによる被害は12件などの回答があり、書庫が良好でない状態であることが判った。

平成19年4月、全学の業務改善検討委員会の元に「資料保存環境整備部会」が設置された。設置以降から今年度にかけての資料保存の取り組みは以下のものである。

- ・「京都大学図書館機構所蔵資料保存環境アンケート報告書」作成
- ・「図書館資料保存環境整備マニュアル(書庫環境編)」と付録「書庫環境チェックリスト」の作成ならびに調査・集計・改善点の提案
- ・カビ除去の研修
- ・全国図書館大会における「京都大学における資料保存の取り組み」の発表
- ・「緊急アピール!こんな事をしてはならない」ポスター配布等



この約2年間の資料保存の取り組みはまだ緒についたばかりである。部会メンバーの担当が閲覧系業務のため、利用者の多い時期には資料保存より通常業務が優先されることは避けられない状況である。今後5年、10年後には資料保存が通常業務として行われていることを切に願う。

ところで附属図書館のカビ除去は、今年度、雑誌の一部分を業者に委託し除去する取り組みが始まった。今年度は学内で職員向けのカビ除去の研修も実施する。今後カビが増えないように、継続して除去していく予定である。

(資料保存整備部会)

*「京都大学図書館機構所蔵資料保存環境アンケート報告書」(附属図書館研究開発室/資料保存環境整備部会、2008年3月) <http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/52418>

図書館の動き

平成20年	17日	図書館・室利用者アンケート調査実施 (~1月30日)
11月 5日		近畿イニシア初任者研修(~6日大阪市大)
6日		館長任免式・着任式
11日		国公立大学図書館協力委員会(NII)
14日		国立七大学附属図書館長会議・同事務部 課長会議・同協議会(北大)
		実務研修(レファレンス・中級編)
20日		図書系連絡会議
28日		国大図協近畿地区協会事務連絡会
12月 2日		国立大学図書館協会シンポジウム
3日		国立大学図書館協議会人材委員会
10日		国立大学図書館協議会電子ジャーナルシンポジウム
11日		実務研修(収書・基礎編)
12日		京都大学図書館協議会(平成20年度第4回)
	25日	図書系連絡会議
	平成21年	
	1月 1日	附属図書館研究開発室専任准教授着任
	8日	図書館協議会第三特別委員会(平成20年度第3回)
	14日	業務改善検討委員会 附属図書館研究開発室会議(平成20年度第1回)
	15日	国立大学図書館協会シンポジウム(東大)
	19日	附属図書館「学習室24」開室
	22日	図書系連絡会議
	23日	DRF地域ワークショップ(阪大)

目次

(新機構長就任挨拶)

京都大学における図書館の役割と当面の課題	藤井 譲治 ..	1
平成20年度 京都大学図書館機構 第3回 講演会 「図書館の目指す先に見えるもの - 図書館の未来戦略・未来地図 - 」		2
附属図書館研究開発室准教授着任のあいさつ	古賀 崇 ..	3
<特集: 将来構想 7 > 図書館に想う 4 図書館なんて、もういらない?	金子 周司 ..	4
<特集: 将来構想 8 > 図書館に望む 1	鈴木 隆洋 ..	5
<特集: 将来構想 9 > 図書館に望む 2 「古今図書館随想」	田林 千尋 ..	6
<特集: 将来構想 10 > 図書館に望む 3 「桂キャンパスの図書館」 ..	林 倫子 ..	7
KULINEから電子ジャーナル・電子ブックが検索可能になりました		8
「学習室24」オープン!		10
「一冊の本から」 <一冊の本シリーズ11 >	高井 正成 ..	11
京都大学農学部図書室の紹介		13
資料保存の取り組みについて		15
図書館の動き		16

編集後記

テーマ「将来構想」3号目の今号では、教員と院生の方々から御意見をいただきました。学生の声は図書館が前進する確かな原動力になります。年末年始に実施した図書館機構の「利用者アンケート」でもその声を集めています。「静脩」でも報告いたします。新機構長、専任准教授を迎えて、新しい図書館に期待が膨らみます。(editor)